その時わたしは言った、「わざわいなるかな、わたしは滅びるばかりだ。わたしは汚れたくちびるの者で、汚れたくちびるの民の中に住む者であるのに、わたしの目が万軍の主なる王を見たのだから」。

二章　エリ

空はどこまでも白く、明かりもないのにただひたすらに明るかった。踏みしめる地面に安置はなく、どこまでも不安定だ。正臣の眼前には果てしなく広がる黒い本の山が無限に広がっている。

正臣はその中を、当てもなく呆然をしながら歩いていた。本を踏みしめる度に嫌な感触がする。乾いた紙の感触。硬い装丁の革の表紙。

なぜその全ての表紙が黒いのか、それを説明してくれる者はどこにもいない。

黒い本を踏み、歩いていると、どうにも心がいたたまれなくなる。ただ、無造作に積み上げられただけの、内容も解らないような雑多な本の群れ。ただそれを踏んで歩いているだけだというのに、何故こうも胸が居たくなるのだろうか。いたたまれなくなるのだろうか。正臣は頭を働かせようとするが、まるで夢の中にでもいるかのように、頭に靄がかかって考えることができない。

本を粗末にするのは良くないとか、そういった常識的な感情ではない。根本的に心に訴えかける何かが、正臣の胸中をただひたすらに支配している。

「晴海ねぇ」

誰か、懐かしい少女の名前を呼んだ時、正臣の脳裏から急に靄が晴れていく。我に返ったように目を見開いて、左右に視線を慌てて揺らしながら、正臣は自分が置かれてい

る状況を確認しようとした。
とりあえず、目に飛び込んできたその風景を一口に表現するならば、果てしなく続く本の集積地だ。
ごみがどこまでも広がる夢の島よろしく、黒い本の山がただひたすらに広がっている。
その山の向こうに視線をやると、山から飛び出した巨大な本棚が目に飛び込んでくる。本棚は無限の高さに天まで伸びており、その棚には純白の本が収められている。
白い本は理路整然と綺麗に本棚へ収められており、雑然と詰みあがっている黒い本とは対照的な姿を保っていた。
正臣は足場になっている黒い本を一つ持ち上げて、それを開こうとした。しかしその本は開くことが出来なかった。
まるで読まれることを拒絶しているかのように、黒い本は頑なに開こうとはしない。正臣はしばらく黒い本を開こうと粘ったが、やがて諦めるとそれを投げ捨て、遠くの巨大な本棚へ向けて歩き始めた。
黒い本の山は踏みしめて歩くことが出来る程度には頑丈だが、当然足場として役立つように敷き詰められては居ない。漫然と詰みあがる本同士の間には、多くの隙間が空いている。脚を踏み外せば、体ごと飲み込まれる。そんな危うさが感じられた。細心の注意をもって歩かなければならない。
正臣が視線を上に向けると、その先に空は無かった。代わりに上空を覆っているのは、

琥珀色のただただ広い天井だ。琥珀色の天井はドームのように広がっており、星も無く、太陽も無いのに、ただただひた明るかった。その明るさは真昼のようで、昼や夜といった時間の経過をまるで感じさせることがない。まるで、時の止まった空間にでも居るかのようである。

「俺は、確か……祐介の部屋にいたはずだよな？」

確認のためにも、正臣は独り言を呟く。頭の中を整理するために、一度思考を言語化することは重要だ。独り言を呟くことで、正臣は自分の考えるべきことを思い出し、記憶の整理へと取り掛かることができるようになる。しばらくしてから正臣は、つい先ほどまで、自分が確かに祐介の部屋に立っていたことを思い出した。

祐介の部屋に正臣は確かに立って、あの恐ろしい白い本に触ったのである。触った感触も覚えている。革の装丁に滑らかな紙の手触りはひんやりとしていて、興奮した正臣の手には心地よいものだった。

正臣は触っても特に何も起こらなかったので、拍子抜けしてぺらぺらとページをめくっていた。するとまぶしい光に包まれて、気が付いたらこの場所を歩いていたのだ。

記憶がはっきりしたものの、正臣が混乱から解放されることはない。自分が直面している事態を、まだ受け止めきれずに呆けている。

思考を整理するためにも、そして現状を把握するためにも、正臣はとりあえず歩こうと考えた。歩くしか出来ることが思いつかなかったのだ。

とりあえず、正臣は辺りを見渡せる高所を目指した。詰みあがった本の山をよじ登り、その山へ脚を掛けて這い上がっていく。山でもどこでも、遭難したらとにかく高い場所を目指して登れと、正臣は以前に学んだ緊急時の定石を思い出したからだ。

途中で何度か本が滑り落ちて足場が崩れそうになったが、そのたびに本にしがみついて事なきを得た。頭はぼんやりしているが、不思議と身体は思い通りに動き続ける。疲労も痛みもなく、正臣は難なく本の丘の上へとよじ登ることができた。

黒い本の丘の先を覗き込むと、視線の先には、やはり巨大な本棚が存在する。

近くで見ると、白い本を収める本棚は更に巨大に見えた。どのぐらい大きいのかは見当もつかない。

しばらく見上げていると、遠近感が狂うような気持ち悪さに襲われて、正臣は本棚を見上げるのを中断した。そういえば初めて明石海峡大橋を真下から見上げた時もこんな感じだったな、と関係のないことを思い出す。

正臣は視線を下におろして、本棚の麓に注目した。本棚までの距離を測るためだ。

本棚の麓まではそう遠くないことを確認した時、正臣は本の山に腰掛けている少女の姿に気が付いた。

この不思議な空間に人が居ることに正臣は目を疑ったが、確かにその少女はそこに居た。断じて見間違いではない。黒い本の山の上で、白い本を開き、読んでいる。

長い髪に、白い肌。染み一つない純白の衣。髪も美しい白銀で、その双眸も髪と同じ

色に輝いている。目鼻の通った顔立ちは、整った造形の人形よりも更に美しく、この世の存在とは思えないような姿をしていた。
美しい巨大な絵画の中、画家がまるで、最後に彼女を塗り込むのを楽しみにしているかのように、少女には一切の色が与えられていなかった。正臣は、絵画の中に絵の具の塗り忘れを見つけたかのような、不思議な感覚を覚える。
性別は、おそらく少女だとおもう。髪が長く、線も細く。そしてガウンとワンピースをまとっているので少女に見えるという理由だけがその根拠だ。
少女は黙々と、白い空間の中で本を読み続けている。ページをめくる手つきはとても丁寧で、少女がそれらの本をどれだけ大切に扱っているかが一目でわかるほどだ。
正臣は、久しぶりに異性というものに見とれた。
やがて少女は手を止めて、本の山の上に立っている正臣に視線を向ける。
距離はかなり離れているはずだが、まるで正臣が最初からそこで見ているのが判っていたかのように、少女は柔らかく微笑んで正臣へ手招きをして見せた。
細い指で、おいでおいでと手招きをする少女に、正臣は我に返って少女の元へ近づいていく。まるで夢でも見ているようだ、すべてに於いて、現実味がまるでない。
この白い世界に来てから、正臣の全てが狂っているかのように噛み合わない。いつもの調子が取り戻せる気がしないのだ。
「久しぶりだね、正臣。待っていたよ」

まるで陽に照らされたガラス玉のような声が響いて、正臣は我に返って少女の言葉に耳を傾ける。その声はあまりにも綺麗な楽器の音色のようで、正臣はそれらの音が言語を奏でていることにしばらく気づくことができなかった。

少女は白い本を閉じて、膝の上に置きながら正臣に視線を向ける。

「泣かないで正臣。怖がることもない。ここへ君を招待したのは私なのだから」

少女は、そんな正臣の混乱した様子を、さも「見慣れている」かのように気にもせず言葉を続けていく。何もかも手慣れている、そういった少女の態度は、正臣の心を不思議と落ち着かせ、冷静さを取り戻させる。

「まあ、座りなよ。本しかないけどさ。でも気を付けてくれよ。この黒い本も、私の大切な本なんだから」

少女に促され、正臣は本を積み上げて椅子を作り、その上に座った。近くに来て改めて見つめると、その少女はやはり幼い姿をしている。年齢は十か、十一か、十二は行かないだろう。そんな外見だ。

髪はとても長くて美しい銀色、スカートからのぞく脚は折れそうなほどに細く、肌は磨いた銀のように真っ白で、うっすらと光り輝いている。少女が正臣をじっと見つめると、正臣は何もかも見透かされているように感じて、思わず数歩後ずさった。

少女の銀色の目には、いつの間にか紅い光が宿り揺らめいている。その瞳でしばらく正臣を見つめた後、少女はにこやかに微笑んで見せた。

「さて、何から話したものか。正臣とまたこうして話せるのが、私は嬉しくて仕方ないよ。私の可愛い正臣。とりあえず何か言うべきことはあるかい？　君とこうして話が出来るなんて夢のようだよ。今日の日を、私はずっと楽しみにしていたんだ」
「なんだ……？　俺の事を知っているのか？」
それまで黙っていた正臣は、第一声に少女にその質問を投げかける。
まるで古い知己に久しぶりに出会ったとでも言わんばかりに、少女の言葉には好意と親しみがあふれかえっている。正臣と目の前の少女に面識はない、はずだ。しかし相手は正臣とずっと知り合いで居たかのような態度で、接っしてくるのだ。
名乗ってもいないのに、当たり前のように正臣の名前も呼んでいる。知ったかぶりをしているような表情でもない。
自分を知っているのかと言う正臣の質問を聞くと、少女は目を丸くした後で、満面の笑みを浮かべ両手を広げる。
「勿論知っているとも。君の事は、君が生まれる前から知っているよ」
「月並みだが、お前は誰だ、なんて聞いてもいいのか？」
「勿論」
少女は目を細めて嬉しそうに笑って見せる。まるで自分に興味を持ってくれたのが嬉しくてたまらない、とでも言わんばかりだ。
「私は在って有るもの。熱情のもの。そしてねたむもの。聞かれればそう名乗ることに

している。もっとも、ここに来た数名は私の事をエリと呼ぶけれど」
本を持ったまま立ち上がると、エリと名乗った少女は、大切そうに白い本を本棚の中へ収めてみせる。
あまりにも現実とかけ離れているその光景は、正臣にとって受け入れがたいものであるのだが。しかし、どことなく懐かしい光景にも思えて、正臣はひたすらにその光景に見入っていた。昔、いつか昔、どこかで見たような、自分は一度ここにやってきたような、そんな気がしてならないのだ。
「まあ、私の事はどうでもいいじゃないか。折角君がここに居るんだ。君の話をしよう」
少女に提案されて、正臣はまた我に返り、慌てて大きく声をあげる。
「そうだ、俺は白い本に触ってここに来たんだ。ここはどこだ？ 妹の司や、弟の祐介は無事なのか？ 此処に来なかったか？ 他にも何人かここにきてるはずなんだが」
「勿論来たとも、全員私がここに呼んだのだからね」
「だったら話は早い、家族が心配してるんだ。司と祐介を返してくれ！」
エリが二人を知っていると認めるや否や、正臣は彼女に詰め寄ってその胸倉を掴もうとした。しかし、どうにもエリに触るのはためらわれて、正臣は掴もうとした手を思わず引いてしまう。
「もう一度言うぞ、弟と妹を返せ」
「私の方を向いて、こんなに顔を近づけてくれるなんて嬉しいよ、正臣」

「話をはぐらかすな」
「はぐらかしては居ないさ。君は一つ勘違いをしているね。まるで私が二人を誘拐でもしたかのように言うけれど、私はここへ招待しただけだ。勿論、本人の意思でいつでも帰れたし、現に今、正臣だって望めばいつでも帰ることができる。私がここに彼らを呼んで行ったのは、私の願い事を彼らに聞いてもらったことだけさ。祐介も、司も、結果的に戻らなかっただけで、別に私が君から弟や妹を奪ったわけではない」
とりあえず離れよう。それともキスをしてくれるのかい？ そう声を掛けられると、正臣は顔を赤くして、後ろに数歩離れる。
「改めて言うけどね、私は二人に、私の計画に協力してくれないかと願っただけなんだよ。祐介も司も、自分の意思で私の願いに応答してくれた。勿論、芽音や聖、それにジャングもね。彼らは自分の意思でここから先へ進み、この扉の向こうへ向かってくれたんだよ」
エリが振り返ると、今までそこになかったはずの大きな紅い扉が現れていた。
両開きの木製の扉で、立派な装飾がなされている。色彩の無い世界の中で浮きだつ紅は、まるで塗り忘れの絵の具を慌てて塗ったかのように調和がない。
不自然に浮き立ち、不気味に光る紅い扉は、この白い世界の中で明らかに異質であった。しかし、エリは気にもせずに手を伸ばし、扉を指さしてにっこりと笑ってみせる。
『この先にある世界を救ってあげて欲しい』、私は司や祐介にそうお願いしたんだよ」

「世界を救う？ 小説やマンガじゃあるまいし。そんな話があってたまるか」
からかっているのか、馬鹿にしているのかと正臣は呆れたように笑って見せる。しかしエリは振り返って、からかうでもなく、馬鹿にするでもなく、まっすぐに正臣を見つめて言葉を続けていく。
「うん、正臣。もちろん別にこの扉の先にあるのは、君が普段アニメや漫画、小説で読んでいるような『異世界』じゃない。私は天地を何度も造った覚えはないからね。多少時間軸が異なるけれど、君が普段暮らしている場所とこの扉の先は、連綿と物理的につながっている君の世界の続きに過ぎない。ただ……」
「ただ……？」
「この扉の先は、君の知っている世界とは全く別の原理、法則で動いている。有体に言えば、君が知っている『剣と魔法の世界』に酷似している。そんな場所なのさ」
はあ、と正臣は生返事する。エリの言葉があまりにも突拍子なさ過ぎて、現実感が無いからだ。既に非現実の集大成のような世界に連れてこられて、現実味もくそも無いものだが、流石に藪から棒に妙なことを言われて受け入れられるほど正臣は純粋ではない。
それが本当かどうかをまずは疑ってしまうのは当然の反応と言える。
「うん、みんな最初に聞いたときはそういう反応だったよ。祐介なんて君と生返事の仕方まで同じだったからね。君達はやっぱり兄弟だ」
くすくす、と笑ってエリは扉に手を当てて言葉を続ける。

「まあ、剣と魔法の法則は別にどうでもいいんだ。それはただのマクガフィンに過ぎない。この扉の先が、ＵＦＯの世界でも、猿の惑星でも、左手のレーザーガンが物を言う世界なんでもいい。なんなら超巨大ロボットの世界でもいい。でも本題はそこじゃない」
「じゃあ、本題は何なんだよ」
「うん、問題は、この扉の先の世界の、魂の在処についてさ」
エリは後ろで手を組んで、横目で正臣を見つめる。
「全ての人間は物語だ。始まりがあり、終わりがある。その人の物語が終われば、魂の在処を目指して、その物語はこの場所へと戻ってくる。全ての人はそうであるし、そうでなければならないんだ。けれども、この先の世界はそうではないんだよ。戻ってくるべき魂を捉える牢獄があって、誰も彼もその中に捉えられている。私はそんな牢獄の存在を許したつもりはないし、許すつもりも無い。だからそれは破壊しなければならない」
「さっきから何を言ってるんだ？ まるで理解ができないんだが」
「うん、うん。そうだろうね。正臣が理解できないのは最初から判っているよ」
「馬鹿にしてんのか！」
エリのからかうような口調に、正臣は腕を組んで凄んで見せる。
「いいや、今は判らないでも後になれば解るから。あえて今ここで言っているのさ。要するにね、正臣。君には勇者になって、この扉の先の世界を救って欲しいのさ。ちゃんと首尾よく事が済んだら、祐介も司も返してあげる。失われた時間も、壊れた生活も、

全てを元通りにしてあげるよ」
やっとエリの話が理解できて、正臣は黒い本の上に腰掛けた。まるで安物のロールプレイングゲームのような話である。冗談を言っているようにしか思えない。
しかし、目の前で一方的に話すエリの様子からは、こちらをだまそうとしている雰囲気は感じられない。かといって、真に迫る言葉遣いかというとそうでもないのだ。
強いてその感想を口にするならば……
「うさんくせぇ……」
「ひどいこというね。声に出てるよ」
思わず本音を漏らした正臣に、エリは拗ねたように唇を尖らせる。
「私ほど、この世で公正に物事を進める奴もいないと思うんだけどな。約束は絶対に破らないしね。それを胡散臭いなんて失礼しちゃうね」
ぷりぷりと怒りながらエリは扉から正臣の方へ歩いてきて、正臣の前にちょこんと座って見せる。エリの怒った顔に正臣は慌てて「すまない」と謝罪した。
「謝ってくれるなら赦す」とエリはあっさりと正臣を赦して、気を取り直すように笑みを浮かべて続ける。
「という訳で、どうする正臣？」
エリは先まで怒っていたことなど最初から知らなかったかのように、正臣の隣を嬉しそうにキープしている。隣に座れて嬉しいとでも言わんばかりだ。

「なんだよ、私のお願いを聞かなかったら云々とか、脅迫しないのか？」
自分に何かさせようと思うなら、そこには強制力が必要だ。てっきりこの後、祐介や司の命を人質に、脅迫でもされるのかと身構えていた正臣は、拍子抜けしたように声をあげる。
「しないさ。私は君を使うと決めてはいるけど、それを引き受けるかどうかは完全に君の自由だからね。君が何を決めるのか、どう決断するのかについて、私は邪魔するつもりはないし、指図もしたくもないんだよ」
「じゃあ、俺が『イヤだ』って言ってさ。ここから帰ったらどうするんだ？」
「それは困るけど、その時は仕方ないから他の人を当たるしかないね」
エリは初めて苦笑を見せる。どうやら本気でそう言っているようだ。
「正直、俺はお前の言ってることが信用できないよ」
「それはそうだろうさ。君と私の関係は今始まったばかりだからね。でもまぁ、これからは、少しずつでも信用してくれると嬉しいと思うよ」
あっけらかんと返す少女に、正臣はそれでいいのかよと呟いてから続ける。
「さっきから聞きそびれてたけどさ。お前はあれなのか、この世界で言うところの神様って奴なのか？」
「うん、その通り。神でも創造主でも、インテリジェンスデザインでも、存在Xでもなんでもいい。でも、正臣の国で言うところの『神』とは少しニュアンスが違うと思うよ」

正臣の言葉に、エリはにっこりと笑って当たり前のようにうなずいた。
「あっさり言ってくれるなぁ……」
「私は嘘を言わないからね。質問されたから答えただけさ。ただ、それを受け止めて私がそういう存在だと信じるかどうかは君次第だ。私を受け入れてもいいし、拒絶してもいい。……でも、もし私の事を信用してくれるなら、私は、私の力で君の事を助けてあげることができる」
「俺がお前のことを信用しなかったら？」
「助けられない。君が『要らない』っていってるのに、私が無理やり君を助けたら、君の自由意思を奪うことになるからね。私は君の自由な意思をを邪魔したくはないんだよ」
納得できるんだか、できないんだか、よくわからない理屈だ。四の五の言わずに誰にも彼にも良いと思うことをしてやりゃいいのにと思う。
しかし、これは実に難しい問題のようだ。この辺りを突っ込み始めたらきっと夜が明ける。それほど入り組んだ哲学的話題であることを、正臣の直感が告げている。
その証拠に、エリの方は、根掘り葉掘り尋ねようとする正臣の態度に目を輝かせている。なんでも聞け、もっと私のことを知れ、とでも言わんばかりだ。
徹底的に話を長引かせる方向へもっていって、正臣との会話の時間を長引かせるつもりなのだろう。そのような恣意的な意図を感じる。確証は無いが多分正解なはずだ。
それはごめんだとばかりに、正臣はそれ以上、その話題についての質問をせずに話題

を切り替える。
「まあ、つまり、あの扉の向こうの世界とやらに、祐介も司もいるって訳だな」
急に話題を切り替えた正臣に、エリは露骨なほどに残念そうな顔をする。そして唇を尖らせ「そうだよ」と言葉を返した。
正臣はそうか、と返事をしてから考える。弟と妹連れ戻すことは決定事項だ。これは絶対に諦めるわけにはいかない。しかし、目の前のエリの思惑に乗ってやるのも面白くない。要は弟と妹、ついでに他の失踪者を探し出せればいいのだ。ならば、人探しだけさっさと終わらせて帰ってくればいい。
「悪いが、俺はお前のお願いを聞いてやるつもりはない。だが妹と弟は返してもらう。だからこの扉の向こうへは行ってやる。でも、妹と弟や、他の失踪者を見つけ出したらその足で帰ってくる。俺はそうする。そう決めた」
正臣はエリにそういうと、扉を指さして立ち上がる。
その返答はエリにとっては面白くないものであっただろう。しかし、だからと言ってエリはそれに干渉したり、妨害したりすることはできないはずだ。
何故なら今しがた、エリはその口で正臣の決断に干渉はしないし、したくないとはっきりと言ったからである。そして自分で嘘はつかないとも言っているのだから、それを覆すことはしないだろう。
エリはその返答に少し残念そうな顔をして、困ったように笑った後、「うん、それでい

いよ」と返事をして見せる。「言うと思った」とでも言わんばかりの表情だ。まるで正臣が最初からそう言うのが判っていたかのようである。
何はともあれ、もう後戻りはしないし、戦うと決めたのだから正臣には目の前の扉を開くという選択肢しか残されていない。正臣は扉に手をかけて、軽く深呼吸した。この先に進むと、もう全てを終えるまで元の世界には帰れない。そんな確信めいた予感がある。自分も失踪するのだろう。祐介や司の様に、全てが終わるまでは。
正臣は扉のノブを握り、そのまま扉を開いて見せた。

――君は、晴海ねぇの為に泣いてくれるんだね。

その瞬間、正臣は夢か現か分からないが、自分の昔の言葉を聞いたような気がして立ち止まる。エリに一つだけ聞かなければならないことを同時に思い出した。
「エリ、行く前に一つだけ」
「なんだい、何でも聞いてよ」
「……前に一度、会ったことがあるかな、俺達」
その質問に、エリは目を丸くする。

――君はいつも泣いてるの？ 君の為にしてあげられることはないかな。

そしてエリは満面の笑みを浮かべると、立ち上がって腕を伸ばし、正臣を抱きしめる。そしてこともあろうに、正臣の唇を奪って見せた。

突然の出来事に、正臣はしばらくの間硬直し、頭が真っ白になる。

「いやいやいやいや、何してんのお前」

そして正臣は、思わずエリを突き放して数歩下がった。エリはしてやったり、とばかりにこっこりと笑って、正臣に手を振って見せる。

「あるよ、正臣。私は君に出会って、だから君を選ぶと決めたんだから」

その瞬間、正臣は妙な浮遊感に襲われた。慌てて飛びのいたはずみで、目の前の赤い扉を突き破ってしまったのだ。扉が開かれ、その先に正臣は吸い込まれる。目の前に広がるのは赤い空間だった。赤の中に無数に浮かぶ目の大群。何か恐ろしいものを見た気がして、正臣は目を見開いて絶叫する。

「また逢おう、正臣」

「おわぁあああああ！」

最早エリの声は正臣には聞こえない。悲鳴を上げるなんて何年ぶりだろうか。正臣は、真っ赤な空間の中に成す術も無く吸い込まれて行った。

○

気が付くと、正臣は揺れる地面の上に寝そべっていた。
木製の木の板の上。見渡すかぎりに蒼い空。ついでに白いカモメも飛んでいる。先まで見ていた真っ白な空間はそこにはなかった。ここが確かに現実の世界だということを知り、正臣は身体を起こす。
座っている床は木材のようだが、どうしてこうも揺れているのだろうか。正臣は不思議に思いながら、ぼんやりとしばらく床に触っていたが、しばらくした後、自分が船に乗っていることにようやく気が付く。
次の瞬間、頭が割れるように痛いことに気づいて、思わず頭に手をやった。
ぶつけでもしたのだろうか。頭を押さえながら周りを見回すと、そこには海に向かって釣り糸を垂らしている女が一人いた。
赤毛のセミロングの髪を一つに束ね、ターバンを頭に巻いている。装いはズボンと簡素なシャツ。腰にはやや短めの曲刀を下げていた。わきにはバケツが置かれており、中で釣れたばかりの魚が跳ね回っている。
「おや、起きたっすか。まだ安静にしてた方がいいっすよ」
釣り糸を垂らしている女は横目で振り返って、正臣へにこやかに笑って見せた。船に置かれている木箱の上に胡坐をかいて、それを椅子に舟端へ陣取っている。
女は映画の中に出てくる海賊、それも下っ端のような格好をしていた。

船の上でコスプレをしている……という訳ではないらしい。その服はところどころ痛んでおり、日常的に海の上で使っているのだろうことが容易に想像される。
正臣はぼんやりした頭で他に誰か居ないのかと船の中を眺めまわす。小さめのヨットのような船の中に、他の人間は見当たらない。どうやら二人きりのようだった。
「そもそもなんで、俺はこんなところにいるんだっけ？」
正臣はそこまでぼんやりと独り言を呟いてから、自分が得体のしれないあの場所から、扉の向こうの方へ落ちたことを思い出した。
そうだ、そういえば剣と魔法の世界に行けとか滅茶苦茶なことを言われたのだった、とようやく我に返って、目の前の女に四つん這いで近づいていく。
「あの、えっとですね！」
「ああ、私にはため口で良いっすよ。今日から私、貴方の部下になりますんで」
女はボートの淵に竿を固定すると、そのまますくっと立ち上がって「よろしくお願いするっす船長」と軽く敬礼のポーズをとって見せる。
改めてみると際立って絶世の美女というわけではないが、かわいらしい顔立ちをしている。十分美少女と言えるだろう。年齢は正臣より少し年下だろうか。十五か、十六か。
「花も恥じらう十四歳っすよ。私の事は女海賊Ａと呼んでください」
「女海賊Ａ？」
いや、それは名前ではないだろうと、正臣が思わず声を上げようとすると、女海賊Ａ

は気が付いたように「ああ、呼びにくいならA子で結構っす」などと補足してくる。
そういう問題ではないのだが、しかしそこにこだわっていると話が先に進まないことを悟って、正臣は質問を変えた。
「じゃあ、A子さん」
「はい、何でしょう」
「ここはどこですかね。あと俺はなんで船に乗ってるんでしょうか」
A子はその質問ににんまりと笑うと腕を組んで「お答えしましょう」と親指をぐっと突き上げる。
「実は私も解らないんっすよ。この船は現在、絶賛漂流中っす！」
「ナニィー！？」
親指を突き立てまま、良い笑顔で声をあげるA子の言葉に、間髪入れずに正臣が叫ぶ。
しかしA子の方はからからと笑って、木箱に再び腰掛けて胡坐をかいて見せる。
まるで慌てていないのは、何か秘策があるからだろうか。それとも単なる楽天家だからだろうか。そもそもこの女は何者なのだろうかと、次々と正臣の脳裏に疑問が浮かんでくる。しかし、正臣は意外と冷静の物事を受け止めている自分が居ることに気づいて、不思議に思い小首をかしげる。
（あれ、でも俺、思ったより動揺してないぞ）
しかし、改めて考えれば変な話でもない。つい先ほどのあれほどの体験をしたのだか

ら、多少の物事には動じなくなっているのである。
　家の寝室から不思議な場所へ移動して神（と名乗っているもの）と出会い、そして海の上で遭難している。ここまで突拍子もないと、最早どうにでもなれと肝が据わってしまう。
「おや、叫んだ割には意外と動揺してないっすね？」
「いや、まあ、ここまで色々体験するとな。流石に肝も据わるってもんよ」
「いやあ、その意気っすよ船長。私もこの世界は初体験なんで、頼りになるっすねぇ」
「いやいやいやいや」
　何か聞き捨てならないことを聞いた気がして、正臣はA子に注目する。したり顔で腕を組んだA子の前に立ちあがって、正臣は思い切り手を突き出した。
「お前、一応でも関西在住を舐めるなよ？　そんな意味ありげなコスプレしておいてこの世界の住人じゃないのかよ。剣と魔法の世界って前情報じゃん？　なんかそれっぽい恰好してるじゃん？　女海賊Aっていったじゃん？　お前それでこの世界初体験って色々詐欺じゃないの！？」
「例えこの世界出身だとして、地図もないし現在地も解らないのに、地形把握なんてできっこないっすよ。一応船のことなら詳しいんで安心してもらって結構っすけど」
「船乗りっぽい恰好してるのは伊達じゃないんだな？」
「勿論っすよ。私も操船術や操帆術、航海術は一通り納めてますんで。この世界の言葉

や知識もあらかじめ予習済みっすよ」
「それは頼もしいですね。……いやいやいや、そうじゃなくて」
じゃあお前は一体誰なんだよ、と正臣は頭を抱えてその場にうずくまる。とりあえず、このA子という少女とは深い相互理解が必要そうだ。
船の外を見れば現在快晴で波が乱れている様子もない。見渡す限り海ばかりで陸地も見えない。幸い、A子とゆっくり話す時間だけはありそうだ。
正臣はおもむろに近くに転がっている木箱を持ってきて、A子の前においた。
そしてそこに座り、腕を組んで深呼吸を何回か行う。
混乱していても仕方ない、とりあえず今するべきことは、このA子と情報交換を行うこと、そして現状の確認だ。とりあえず現実を見なければ始まらない。
「それで、A子さん。この船に食料はあるんですか？」
「ビスケットが数日分、水が一週間分ってところっすね。幸い燃料もあるので煮炊きもできるっすよ。もともと漁船だったみたいっすね。釣り竿があったんでとりあえず魚を釣って食料を確保してるところっす」
「それは賢明ですね」
「当然っすよ、出来る女っすから」
褒められると、胸を張って鼻高々に嬉しそうな顔をする。愛嬌のある仕草だ。胸がもうちょっと出っ張っていると更に良いのだが、そこは今後に期待であろうか。

「水の確保はどうしましょうか」
「予備のマスト兼日よけがあるので、これを使って雨を集めるしかないっすね。一週間以内に雨が降らなかったらアウトっすけど」
「……それじゃ、水は節約する方向で」
「了解っす！」
敬礼するA子の返事に、「遭難しているのに元気いいなぁ」と正臣は目を線にする。
「それで、この船って二人で動かせるんですか？」
「ああ、それは大丈夫っすよ。この船はバルシャっていう内海移動用の船なんすけど、一本マストの旧型なので操作は楽っす。でも外洋航海には全く向かないんで、大波が来たら簡単に転覆するっす」
「ええ……なんでそんな船に乗ってるの俺達」
「乗っちゃってるもんはしょうがないっすよ。現実をみるっす。本当は操作に四人は欲しいところっすけど、とりあえず帆の調整だけ出来れば進むには進むんで。二人いれば十分動かせるっす。もう海流に乗ってるみたいっすから、漕ぐ必要もないですしね」
「へえ……」
船に関しては全く知識のない正臣としては、A子の言っていることに頷くしかない。その意見が妥当かどうかすらも判断する材料がないからだ。
航海術、その他をある程度習得しているというのは本当らしいので、不安でも船の使

い方に関しては全面的に信頼して任せるしかない。
「でも、嵐が来て大波になったら一発でアウトなんで、覚悟しておいてくださいっす」
「A子さん、俺ね、エリさんにね、なんか勇者になって異世界を救ってどうのこうのとか言われて此処に来たんですよ。それが、何でいきなりこんな運任せの状況に追い込まれてるんですかね」
「普通、お城の王様の謁見の間で銅の剣と五〇ゴールドからっすよね。それに比べると大分理不尽っすねぇ。ああ、でもVは船の上から始まったじゃないっすか」
だからへーきへーき、とにこにこするA子に、なんで判るんだよと小さな声で突っ込む。最早、細かいことにこだわっていると時間がいくらあっても足りなさそうだ。正臣は置いてある釣り竿を持ち上げる。
「とりあえず……」
「とりあえず？」
「釣りのやり方を教えてください。夕飯確保、俺も手伝います」
「了解っす！」
とりあえず、まずは食料確保が最優先だ。
正臣はA子に教わりながら、初めての釣りに挑戦することにした。

○

さて、わずか数日で陸地が見えて……というご都合主義な展開があるわけもなく、漂流生活は十日以上続くことになった。正臣とA子の乗っているバルシャは海上を当てもなく進み続け、どこへ向かうとも知れない航海を続けている。

暇を無為に持て余すのを嫌った正臣は、海上での航海術をA子に習うことにした。

ロープの縛り方、釣りのやり方、風の読み方、縦帆で逆風を進むやり方 etc…、覚えることは山の様にある。やることが多いのは、不安を紛らわせる良い薬になる。

明日、いや、今日嵐にあって沈むかも知れないという恐怖から、忙しさは正臣の精神衛生を大いに守ってくれることになった。

幸い船倉があって、そこに毛布もあるので、夜は安眠できた。狭いからと、眠るときにA子が平気で抱き着いてくるので、最初の一日二日は安眠は大いに妨害された。

だが、それも次第に慣れてしまった。こういう状況で性欲は起こらないはずだ。俺はロリコンじゃないんだと、正臣は自分に何度も何度も言い聞かせて、誘惑を克服することに成功したのである。

常に潮風に晒されることもなく、日よけもあるので必要以上に水も消耗せず、夜になれば寝て、朝になれば釣りや船具の整備を始める日々が続いた。

A子は航海術に関しては一流の知識の持ち主のようで、正臣の前で巧みに帆を使い、迷うことなく海の上を進んでいく。問題はその行先が見当もついていないことだが、A

子曰く、「船はとりあえずまっすぐ進んでるから、そのうち陸地に突き当たるはずっす」とのことだった。
船具の扱いを覚え、釣りを覚え、運よく降ってきた雨をA子と一緒に大はしゃぎで樽に溜めた。二人でびしょぬれになりながら、それを沸かして甲板で乾杯した。正臣はだんだん船の上での生活が楽しくなり始めていた。
水の確保にも成功し、食料も釣りで安定的に供給できつつある。この海は幸いにも平和な海のようで、嵐もこれと言って起こる気配はない。逆風に悩まされることもなく、文字通りの順風満帆である。
これならしばらくは船の上で生活しても良いかもしれない。
「いやー、駄目っすよ。あと十日もすれば壊血病になり始めるので、私ら死ぬっすから」
沸かしたお湯をジョッキで飲みながら、あっけらかんとA子がとんでもないことを言い出した。
「まじで！？」
「大マジっす」
正臣が甘い考えを持っていることを、表情だけで見抜かれたらしい。
A子はにこやかに、正臣に死刑宣告を行ってくる。
そもそも壊血病ってなんですか？ と正臣が尋ねると、A子はビタミンC不足で起こる致死性の現象だと講義を始めてくれる。

「症状が進むと血を吐いてのたうちまわって死ぬっす。だから名前は壊血病っす」
「ここって剣と魔法の世界ですよね。俺ら剣と魔法との世界でビタミン不足で死ぬんですか？」
「いやぁ、剣と魔法の世界の人だって霞を食って生きてる訳じゃないっすしねぇ。ちなみに壊血病を回避できても、間もなくビタミンB不足で脚気になるのでやっぱり死ぬっす。玄米でもあればいいんですけどねぇ」
「だぁあああ、道行不安！」
「ちなみに脚気っていうのはビタミンB不足で起こる――」
「聞きたくない、聞きたくない！」
頭を抱えて転がりまわる正臣の様子が面白いのか、A子はおなかを抱えてげらげら笑っている。そんなA子の表情に緊張の様子はないので、彼女が言うほどには緊急性はないのだろう。半分冗談、でもいずれはそうなるから覚悟すべき案件。そんな所だろうと思われるが、本当に先行きに不安しかない。
A子はげらげらと笑い続けていたが、一しきり笑い転げた後、横目で何かに気づいて飛び上がった。そのまま船首へ走ると、腰のサックから望遠鏡を引き抜いて、じっとその向こうを眺め始める。
「船長、壊血病は回避できそうっすよ」
「え、どうして？」

転げまわるのを中断して四つん這いで起き上がる正臣に、A子は振り返ってかわいらしく笑いながら親指を立てる。
「陸地っす！」
「まじで！？」
望遠鏡を貸してもらえば、確かに遥か彼方に陸地が見える。
「やった……助かった、のか？」
とりあえずは命をつなぐことが出来そうだと、正臣は自分の幸運に胸を撫でおろす。けれども本当にこれで助かるのだろうか。やはり先行きには不安しかなかった。

○

「いやあ、良かったっすね。陸地について、第一村人にまであえるなんて。これはツいてるっすよ。運が向いてきたっすねぇ」
「この状況を良かったって言える君のセンスに脱帽だよ、A子さん」
手と脚を縄でがっちりと縛られながら、正臣とA子は簀巻きになって転がされていた。
陸地だ、陸地だと喜んで浜に船を乗り上げたところで、正臣達は草むらから飛び出してきた二足歩行の犬や猫に取り囲まれてしまったのである。船の接近にあらかじめ気づき、待ち伏せしていたようだった。

何やら呪文のような言葉や鳴き声をあげながら、獣人達は一斉に石槍を正臣達に向けた。黒曜石を磨いた磨製石器のたぐいだが、原始的でも武器は武器。突き刺されれば十分に死ぬことができる。正臣とA子は多勢に無勢と応戦をあきらめ降参し、こうして捕虜にされてしまったのである。

現在は日もすっかり沈んで、夜の時刻になっている。

月が大きく空に光っている。異世界でも月はあるんだな、と小さく呟いた後、正臣は自分が現実逃避しかけていることに気づいて我に返る。

「でもまぁ、漂流生活でビタミン不足で死ぬよりは大分状況も好転してるっすよ」

「どう見ても暗雲立ち込めてるよね！？ 俺、まだ遣り残したこといっぱいあるんですけど！」

「どうせ死ぬなら、船倉の夜で我慢せずに、この美少女A子ちゃんで童貞を卒業しておけばよかったとか？ いやっすねぇ、船長だったらOKだったんすよ？」

「ちがう！ 俺は弟と妹を探さにゃならんのだ！」

童貞と決めつけられたことに関しては不問にするとして、遠目に煌々と燃え立っているキャンプファイアの明かりに照らされながら、正臣は芋虫のように跳ね回る。

その様子がツボに入ったのか、A子はまたげらげらと笑い始めた。

でもまあ、と笑うのをやめたところで、周りの状況を眺めてA子は真顔になる。

「このままだとガチで夕食にされそうっすからね。そろそろどうするか考えないと」

「二足歩行のしゃべる犬や猫が人間を食うのか？ 人食い民族じゃあるまいし」
それは無いだろ、と正臣が苦笑いして見せると、A子が、キャンプファイアの上にかけられている鉄鍋を顎でくいくい、と差す。
「あそこで具も入らずにぐつぐつ煮立ってるお鍋。周りを取り囲んでる獣さん達。そして簀巻きにされて転がされてる私達。これってどう見ても今夜の食材っすよね？」
「干からびるか、鍋で茹でられかだったら、干からびた方がましだったよね！？」
「抜け出せばいいんですよ。その二択はどっちもごめんっすからねぇ」
はっはっは、と笑いながら、いつの間にやら縄抜けを完了しているA子が、正臣の縄を解き始める。
「ところどころ、地味にすごいよねA子さん」
「出来る女っすから」
さっきまで簀巻きだったのに。まさに一瞬の早業だ。怪盗映画でもあるまいし、こんなことが現実に起こるとは、さすが剣と魔法の世界である。
「いやいや、一時間ぐらいかかって地道に外してたんすよ。今終わっただけっす」
……と思ったが、意外と地道な努力だった。
A子は正臣の縄を解きながら、私、魔法とか使えないんで期待しないでくださいっすね、と念を押してくる。
「それでも縄抜けが出来るなら、俺にとっては十分魔法使いだ」

所詮獣なのか、正臣達は見張りも立てられずに、炉端に簀巻きにしてほったらかしにされている。それが幸いして誰にも見咎められず無事に縄を解くことができた。きっと縄で縛っておけば大丈夫、ぐらいにしか思っていないのだろう。
「二足歩行していようが、所詮獣は獣という訳だ。ちょろいな」
「そうだと良いんすけどねぇ……」
さて、問題はここからだ。海岸に向かって船に乗り、一刻も早くあの二足歩行の獣人達から逃げなければならない。
とりあえず物陰に身を隠しながら、頭をフル回転させる正臣を眺めて、A子は目を細めている。
意外と度胸はあるんっすよねぇ、この人。とでも言わんばかりだ。
「A子さん、とりあえず海の方向って覚えてます？」
「勿論っすよ。月があっちで、あれから二時間経過してるっすから、海はあっちっすよ」
漂流中の十日ほどの星の観察で、A子は大体の星の動き方や時間の流れ方を把握しているようだった。この世界の方角の読み方はさっぱりだが、とりあえず現在地と方向ぐらいは何とか把握できるようである。
「ほんと凄いですね」
「出来る女っすから」
もっと褒めて、と言わんばかりに決めポーズを作ってから、じゃあ行きましょうっす

と二人でこそこそと移動を始める。
話の通じない系原住民からは、さっさと逃げ出すのが安定の最善策だ。二足歩行でしゃべる犬や猫は、少し……いや、かなりもふりたい衝動にかられるが、その代償が鍋の具材にされるのでは割に合わない。
「そもそも、相手の使ってる言葉が全然判らなかったし。何あの言葉。呪文？」
「私は判るっすよ。ひと段落ついたら船長も言語学の勉強しましょうね」
「俺、英語の成績最悪だったんですけど大丈夫ですかね？」
「大丈夫大丈夫、日本人が英語苦手なのは使う機会がないからっすよ」
異世界どころか、外国に行ったって言葉が全く通じないのは当たり前なのだ。ましてこんな人類未到達の世界で当たり前のように会話できるようになるのだろうか。正臣には全く自信がない。
「……ん？ そういえばA子さん、なんで日本語喋れるんですか？」
「ああ、やばい。バレたっす」
やばい、と顔に書いてあるような表情でA子が焦り始める。
「さてはあんたも日本人だな！？ そりゃそうだよな！ ノラクエ知ってたもんな！」
「いやいや赤毛の日本人なんていないっすよ。ノラクエもグローバルスタンダードっす」
だらだらと冷や汗を流しながら、目をきょろきょろさせて、思い切り動揺しているA子の袖を正臣は掴む。そして説明しろと、思い切り揺さぶった。

「わかりました、わかりました。白状するっすから。とりあえず、とりあえず船まで逃げれたらちゃんと話しますから。こんなところで脚を止めたらだめっすよ」
ほら走って、走ってと勢いでごまかすように、A子が正臣の背中を押す。
そう言えばそうだった、今は逃げなければと思い直して正臣が走ろうとすると、隣からにゃぁん、と間抜けな鳴き声が聞こえた。
「ほらぁ、追いつかれちゃったっす」
正臣が脇を見ると、そこには二足歩行の三毛猫が立っており、正臣にも判るぐらいにっこりとした表情で微笑みかけている。
猫って笑うんだな、と現実逃避しながら、正臣達は次々現れる獣人達の石槍に、再び囲まれるのだった。

○

結局、再び捕縛されてしまった正臣とA子は、今度は逃げられないように簀巻きにされた上で、木の上に逆さ吊りにされていた。
「A子さん、一応聞きますけど」
「いやいやいや、流石に逆さ吊りで縄抜けはむりっすよ」
「ですよねー！」

流石にこの状態で縄抜けが出来るほど、A子もアクロバットが得意ではないらしい。今度こそ脱出は不可能そうである。チャンスが到来するまでは、おとなしくぶら下がっているしかない。

「猫ちゃんやワンちゃんが見張りをつけなかったのは、馬鹿だからじゃなくて、逃げても捕まえられるって絶対的な自信を持ってたからなんすねぇ」

「感心してる場合じゃないよ、A子さん！ ああ、神様！ 助けてくれ！」

一しきりわめいてから、「神様はアイツだったぁ！」と、笑顔でピースしているエリの顔を思い起こし更に正臣は絶叫する。

「あれに助けを求めたのか俺は」と自己嫌悪でばたばたとのたうちまわった。そんな様子を見ながら、「本当に元気っすねぇ、この人」とA子は目を線にする。

「船長、あんまり騒ぐと獣人さん達が殺気立つっすよ」

正臣が暴れるのをやめて獣人に目を向けると、獣人達は興奮したように、わんわんにゃんにゃん騒ぎ立てている。正直鳴き声にしか聞こえないが、注意深く聞いていると確かに言葉らしい物を喋って居るのが正臣にも判った。

英語ではない、ドイツ語かフランス語か、もしかしたら韓国語？ イントネーションも独特だ。勿論思い浮かんだどの言語とも違うのだろうが。

二足歩行の獣たちは、そのまま犬や猫というわけではなく、手には指が五本あって、曲がりなりにも人型をしていた。そして身長は百五十センチメートル程ある。

彼らの特徴を一言でいえば、正に童話に出てくる「長靴をはいた猫」そのもので、一応簡素ながら服も纏っているのを見ると、それなりに文明も築いているようである。
非常時で見落としていたが、煮え立っている大きな鍋も鉄製のようだ。鉄を加工する技術は、正臣の知っている歴史に於いても、大分登場が遅かった代物のはずである。
鉄鍋が作れる程度の冶金術と文明を、この獣人達は持っているようだった。
正臣は正直、A子の様にこういった異世界で役に立つ知識や技術を何も持っていない。ボーイスカウトやアーチェリーでもやっておけばよかったと後悔するが、よくよく考えれば、異世界に飛ばされる事態になど、どう予測して備えることができるだろうか。
正臣は無いものねだりはそうそうに切り上げて、とにかく状況を観察することに集中している。

――生き残りたいなら目を開け。耳を鍛えろ。情報の多寡が、お前の明暗そのものだ。

幼い頃に父に教わった金言である。そして、この言葉をないがしろにして、正臣は一度ならず痛い目にあっている。それ以来、正臣はこの金言に従うことで、灰色の高校生活をなんとかいじめられずに逃げ切ったのだ。臆病な正臣が、中学高校の五年間をかけて身に着けた、現在の状況で唯一役に立ちそうな生存術である。
五感を全て使って見回せば、もしかしたら解決の糸口はあるかもしれない。

「A子さん、ところでこいつら何て言ってるんです？」
「お前たちは悪い人間の仲間。グルの前で裁きを下してから鍋で煮て食うっていってるっすよ」
「やっぱり食われるのかよ！ グルって何なんでしょうね？」
「グルっていうのは宗教指導者の事ですよ。ヒンドゥー教や密教その他でよく使われるっす。ちなみに彼らの言語ではガルキムニとか言うみたいです。グルっていったのは、近い単語がそれだったんで、意訳ってことで」
「A子さんって意外と律儀ですよね」
「出来る女っすから」
今回は褒めていません。とりあえずそう突っ込んでから、正臣は獣人達が騒がしくなるのに気づく。耳を澄ますと、だんだんと遠くから騒ぎの声が大きくなってくる。何かがこちらに近づいてくるようだ。
「ほら、どうやらグルのお出ましのようっすよ」
A子が横目でじっと騒ぎの方角見つめると、そこには深くフードを被った人間の女が立っていた。身長はA子と同じ百六十センチメートル前後。女だとわかるのは、A子と違って胸が立派に膨らんでいるからである。
大きさはそこそこ。スタイルもよく、綺麗な長い金色の髪がはみ出ている。
フードの奥で獣人から何やら説明を受けている「グル」は、吊り下げられている正臣

とA子の姿をみると、慌てたように口を開いて、何やら指を差して支持を出している。
面白いことに、その指示を聞いた瞬間に獣人達は驚いて首を横に振りはじめた。そして慌てて正臣とA子を木から下ろし始めたのだ。
いよいよ処刑されるのだろうかと、半ば覚悟して正臣が顔をあげると、そこにやってきたグルがフードを解いてその素顔を見せる。フードの奥から現れた顔は、髪こそ伸びているが、確かに見覚えのある顔だった。
あの日、シーソーで自分に白い本に触るだろうことを予言した、テレサ・ティガールだったのである。